DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

地球を浄化するために僕はそこで裸になる

CHIKYU wo JOUKA surutameni
BOKU ha sokode HADAKA ni naru

添牙いろは illust 天間天祐

それは、あまりにも非現実的で。
彼は今日も、いつもどおりの時間に学校へ向かい、
いつもどおりの電車の、いつもどおりの車両に乗った。
少し身体がだるかったので、席が空いていたのはまさに僥倖。
着くまで眠れれば気分も良くなるだろう、と思っていた。
が、それは軽い寝不足の類ではなかったらしい。
ゆえに、学園前駅でも目覚めることはなく、
どれだけ深く気を失っていたかもわからないほどの昏睡。
目蓋を開けたときに見えたのは、眩しい太陽と、それを透かすガラスの屋根だけ。
だが、その間に人影がある。
丸みを帯びた、美しい人影が。
それは、彼に問いかける。
「……驚きましたか？」
驚かないはずがない。
機械でも石造でもなく、生身の異性がそこにあったのだから。
異性同士の身体の構造を、余すところなく交わらせて。
しかし。

性器(カラダ)を蕩けさせるような甘い快楽と、妖精のような愛くるしさ。
これは驚嘆というより、至福そのもの。
ゆえに、頷きながらも目が離せない。
ぼんやりと、優しい女体(カラダ)を脳裏に焼きつけていた。
これに少女は、これまでの姿勢を一転させる。
「見ないでください！」
女のコからそのように責められれば、男としては再び瞳を閉じるしかない。
「あんまりじろじろ……見ないで、ください……」
だから、彼は黙って横たわっている。
初めての快感に身を委ねながら。

地球を浄化するために
僕はそこで裸になる

添牙いろは

〝その件〟については、テレビでも毎日のように流されていた。が、その確率は国民一億に対して一〇人程度。万分の一どころではなく、それはもはや宝くじ。当たっても嬉しくないものだが、どこかの誰かが人類のために犠牲となってきたのだろう。

その誰かに――朝丘芳生（あさおかよしき）は選ばれた――らしい。

剃毛しなければわからないような秘所に、いつの間にか浮かび上がっていた奇妙な模様。紛れもない〈浄化人〉の証。それがいつ疼き出すかもわからず、状況さえ許せば自宅療養も認められている。

しかし。

彼は大学受験を控えている身であり、対策授業をすっぽかすことなどできるはずがない。どうにも現実味の湧かなかったその男子学生は――後先考えず、通学を続けることを選択した。もし何かあれば、救急車でも何でも呼べばいい、と考えて。

しかし、それはそんな甘いものではなかった。

初めて倒れてから一週間後――それは、同じ電車の中にて訪れる。

「ぅ、く……ぐ……っ!?」

ここで気を失うわけにはいかない。ここで発作が起きたということは、この場所が汚染されているということなのだから。とはいえ、電車内が、ということでもない。停車駅で扉が開くと、芳生は転げ落ちるようにホームへ降りる。

幾ばくの猶予もない。〈浄化人〉には公然猥褻罪が適応されないという特例を信じて……！

「す……すいません……ッ！」

朝の賑わいの中に押し潰されてしまいそうな力なき宣告。その声は誰にも届かないが、不審な様子だけは異様に目立つ。このような人混みでベルトをガチャガチャと外し、ズボンを下ろせば――

「きゃあああああっ!?」

当然のように、悲鳴は上がる。たとえ、毎日ニュースとして流されていたとしても。何より、テレビに実際の現場は映されていない。毛の奥の文様はともかく――その直下から伸び勃起つモノは。

とはいえ、芳生とてそこを見せたいわけではない。邪魔そうに横へと押し退けると、傘を開いたような形の痣は――それこそ、報道番組で見るような赤色に変わっている。

「僕は〈浄化人〉で、その――……〈大気洗浄〉にご協力ください！」

そのように言えば誰かが名乗り出てくれる――と、説明は受けていた。が、そうう

まくはいかないのが現実である。理屈や事情はわかっていても、自分がその当事者と関わり合いになりたいはずがない。少なくとも、このようなフルチン男とは。

ゆえに、その者には認められている。地球を救うための強権が。認められていたとしても、良心は痛む。が、その使命感と、何より……この目眩は耐え難く――

「ね、ねぇ……アンタとセックスすれば、その――……三〇万だっけ？」

声を掛けてきた女は――顔には全力で派手派手しいメイクを施し、髪はキンキンで目にも痛い。それでもブレザーを着てこの時間の電車を待っていたのだから、学校へ向かおうとしているのはわかる。が、これから師に教えを請いにゆく格好には見えない。芳生の学校の制服とはデザインが異なり、彼の濃紺に対して、彼女はグレーだ。同じ路線なのでたまに見かけるが、学力的にも素行的にもあまり良い評判は聞かない。

芳生は、健全たる青年男子である。

年相応に性欲もある。

しかし――異性に対する、好みもある。

だが。

このような不誠実そうな相手だとしても、選り好みはしていられない。

「はい、そう聞いています……」

これは、地球を維持するのに不可欠な行為である。役所に申請すれば、そのくらいの金額が支給されるはずだ。ゆえに女は、純然たる金目当てで。

「オヤジの相手よりワリ良さそ。アタシが相手してやるよ！」

嬉々としてホームの端へと早足で向かっていく。他の人の邪魔にならないように――というより、普通に恥ずかしいから。

芳生も女に続いて、その隅っこまでやってくる。ここまで来れば、車両が届かないためひと気も少ない。が、一歩下がれば電車待ちの乗客たちが列を作っている。いまさらながら一応周囲の視線は気にしつつ……女子校生はスカートの中からパンツを抜いた。

しかし、それでは全然足りない。

「その――……〈洗浄〉には、裸にならないと、いけなくて」

「はぁっ!?」

怒ったような視線を向けられても、芳生の方が困ってしまう。男だとしても、脱げば恥ずかしくないわけがない。それでも、歯を食いしばって準じようとしていたのに、肝心の相手がこれでは。そこは、使命感を持って割り切って欲しい。たとえ、性別の違いはあったとしても。

「バッカじゃないの!?　こんなとこでできるワケ――」

即座に前言を撤回し、女はこの場から立ち去ろうとする。しかし――

「ちょっと、退(ど)いてくんない？　邪魔なんだけど」

ホームの乗客たちは無言で、しかし露骨に行く手を遮る。それも、男だけでなく、同性である女まで。みんな、解っているのだ。ここで誰かが犠牲にならねば、この地域の人々は死滅してしまう。あからさまに金で釣られておきながら、自分の無知を理由に取り下げることなど認めるつもりはないらしい。きちんと報道を観ている人なら、当然知っていることなのだから。

「ち……く……うぅ……」

人垣は、一斉に彼女を睨んでいる。窮地に立たされた横顔は、羞恥で真っ赤に染まっていた。これ以上は見るに堪えない。〈浄化人〉として――その視線たちに一言制す。

「すいません。協力者を必要以上に辱めてはならない、って決まりもありまして」

芳生は自ら素っ裸になっていた。申し訳なさそうに股間を押さえて。男であっても視姦(みか)られて平気なことはない。もう、〈浄化人〉たる証明は少なからぬ数の人たちに確認してもらっている。できることなら、これ以上見世物にはなりたくない。

とはいえ。

その言葉に、女は少しだけ安堵する。こんな頼りない男にかばわれるのは少々癪だ

が――そういうことなら、〈浄化〉に託(かこ)つけて、余計なイタズラをされることもなさそうだ。

「わ……わーったよ！　でも、誰も視姦(みか)るなよ!?　お前もだっ！」

上着のボタンを外しながら、女は男を威嚇する。脱がねばならないことは伝えてあるのだから……女を信じて、芳生はその恥じらいから目を逸らした。

辱めてはならない――と決まってはいても、気にしないことなどできるはずがない。そもそも女自身も、みんなが律儀に守ってくれるなど信じていなかった。ブレザーに手をかければ、背中にチクチクと視線を感じる。実際に視姦(みか)られているのか、視姦(みか)たいという意識が刺さっているのか――それはわからない。どちらにしても、例え違法性はないとしても、金のためだったとしても、こんな屈辱は早々に、短時間で済ますべきだ。そして……こんなことをやらかしてしまっては、しばらく通学経路を変えるしかないな、と煩わしさに女は舌を打つ。

先にショーツを抜いてしまったため、結果としてブラ一枚の下半裸姿。これは逆に恥ずかしすぎて、胸を顕にすることを躊躇する余裕もない。結果として、仕方なく、制服に続いてそれにもすぐに手をかける。

「ぬ、脱いだわよ。これでいいんでしょ？」

すべてを足下の鞄の上に放ったところで、一応自分の股ぐらに触れてみた。やは

り、こんな落ち着かない場所で濡れるはずがない。とっととコトを終わらせるため、女は鞄から金儲けのための小道具を取り出す。

確認を求める女のコの声に、芳生は目を開けた。そこにあるのは、一糸まとわぬ女性のお尻。長く続く線路の先に向けて、裸足で駅のホームに屹立している。念のために靴まで脱いだようだが……実は、そこまでする必要はない。首から下、手首足首より上――でなければ、その指輪やピアスまで

取り外してもらわなくてはならなくなる。が、それを指摘することはない。むしろ、悟られぬよう、芳生も合わせて裸足になった。

しかし、彼女は何をしているのだろう……？　ドレッシングの容器には透明の液体が収められているようだ。それを彼女は少し手に取り、さっと股の間に塗り付ける。

そして――どうにもこの男は頼りなく、自分だけでは痛くされてしまいそうだ――と女は懸念する。かといって、有償の客のようにサービスしてやるつもりもなく、リピートも期待していない。

ゆえに、彼にはボトルごと手渡す。

「これ、使っておいてくれる？」

芳生はそれを受け取ってみたが、使い方はよくわからない。ただ、彼女の使い方は少しだけ覗いている。蓋を開け、中身を手の平に押し出して……その感触で、すべて

を理解した。

きっと、こうすべきなのだろう、と自分の勃起(カタ)いところへ塗りたくり……これから行おうとしていることを夢想する。初めてのときは意識もなく、されるがままに。だが、今度は能動的に異性と対峙している。これに芳生は、〈浄化人〉としてではなく、男として高揚を感じていた。が、それは女性を必要以上に辱めること。あくまで〈洗浄〉という作業として、淡々とこなすべきだ――と芳生は心を鎮めようとする。己の男根を熱(イキ)り勃(た)起たせて。

一方女は、耳を塞ぎ、目を閉じる。ここがどこだかを忘れるために。いつものホテルでの援助交際――そう自分に言い聞かせる。

だが、女の膣(ナカ)内(じょう)に侵入してくる異物は――

「はっ……か……っ!?」

それに、女はすぐ気づく。そういえば……ナマは極めて珍しい。カレシとならちょくちょくあったが、最後の相手とも半年以上前に別れている。その間、自分の親ほどのオッサンばかりを咥えてきた。その久しい性感に、思わず口から吐息が漏れる。

はっきりいえば、女から見て芳生は野暮ったく、性的な魅力は感じられない。ゆえに、自分の殻に閉じこもる。それはもはや、自慰に等しい。

さらには。

「あ、あぁ……いい……気持ち……いい……っ！」

少なくとも、中年の萎えかけたモノよりは快楽をもたらしてくれる。それを口に出すことで、少しは気分も盛り上がってくるはずだ。

「はぁ……もっと……あぁ……もっとぉ……❤」

こうも露骨に両手で耳を塞がれていれば、自分が拒絶されていることは芳生にもわかる。にも関わらず――悔しいことに、女の甘い声と甘い蜜は、男の根源に響いて止まない。快楽は紛れもなく快楽であり、性的興奮を高めていく……！

声が届かないのでは、口にしても意味がない。芳生は黙ったまま腰を撞き、溢れ出すものも抑えることなく――！

ドピュッ！

「～～～～～っ！」

膣内（ナカ）に……射精（だ）されてる……とはいえ……〈浄化人〉とセックスしても、絶対に妊娠（アタ）ることはない――そういう情報だけは、この女の耳にもよく入ってくる。その着床のエネルギーが地域一帯の空気を浄化してくれる、という仕組みの方には無関心だが。

少なくとも、チンコそのものはいい塩梅だった、と女は思う。そして何より、初めての膣内射精（ナカだし）は最高だった。とはいえ、これはない。こんな、見世物のようなセックスなどは……！

この脱力感だけは心地良いが、薄っすらと横へ視線を流すと……ゾっとしてすぐさま胸を隠す。駅に電車は停まっていない。その反対側のホームからは、男たちが厭らしい目つきで――これでも本人たちは自重しているつもりではある。が、どうしても自重できていない。意識するなという方が無理な話で、チラチラギラギラと全裸の女子校生を視姦している。スマホで撮影する者がいないのが不幸中の幸い。〈浄化人〉が言っていたとおり、必要以上に辱める行為は厳重に禁止されているから。

欲に目がくらんだとはいえ……もう公開セックスは懲り懲りである。そそくさと服を取り、すぐさま制服を着込み始めた。

女がモゾモゾと帰り支度を進めている気配を感じ、芳生もまたズボンを上げていく。こんな冷ややかなセックスは二度とゴメンだ、と願いながら。

残りの手続きは淡々と。スマホから四角い二次元コードを発行し、女は〈浄化人〉から承認を受け取った。これを役所の端末に提示し、大気の観測と一致すれば、その場で現金が支給されるはずだ。画面と画面を向け合う非接触の交信。〈大気洗浄〉もこのくらいで済めばいいのに、と芳生は思わずにいられなかった。